

第9回富山県食品ロス・食品廃棄物削減推進県民会議の概要

1 日 時 令和3年3月24日（水）10：00～11：30

2 場 所 富山県民会館 3階 304号室

3. 内 容

（1）議 事

- ア. 食品ロス等の削減に向けた取組みについて
- イ. 意見交換

4 主な意見の概要

<食品ロス削減対策全般>

- ・ 県政世論調査の結果、「すぐに食べるものは期限の近いものから購入する」という消費者がR1の17.7%からR2の25%に上昇している。こうした消費者意識の変化が、今後の日常生活習慣の変化にもつながってくることを期待したい。
- ・ 食品ロスの考え方も年代別により異なるので、若い世代などターゲットを絞って、実効性の伴うような方策を考えることも必要。
- ・ エシカル消費は、食品ロスを超えて、様々なものを包括した消費者行動である。輸送業者や小売店、消費者など皆がウイン・ウインになるための1つの考え方だと思うので、取組みを進めていただきたい。
- ・ 平常時の議論だけではなく、このコロナ禍における非常時の対策についても、県民会議が中心となって情報共有しながら推進していくことが必要。
- ・ 計画の評価指標である「食べきり3015運動協力店、食べきりサイズメニュー提供店の登録数」がかなり増えている。目標に向けて、計画通り進んでいるのかを検証し、伸ばせるところはさらに前に進めていくことが必要。
- ・ コロナ禍で家にいる時間が長くなり、家庭での食材や食事の機会も増え、家庭や飲食店からの食品ロスの出方が変化している可能性がある。こうした状況にも柔軟に対応していただきたい。

<家庭系食品ロス>

- ・ とやま環境チャレンジ10事業について、県内の全ての小学4年生が受けられるようにしてほしい。同事業を受けた子供の親に対してアンケートを実施したところ、子供が家庭で食品ロス削減を意識して生活するようになったとの感想も寄せられている。

<事業系食品ロス>

- ・ 商慣習の見直しに関しては、大手のメーカーでは取組みが進んでいるものの、地方の中小メーカーにとっては、具体的な取組みの進め方など、わからないことも多いので、ガイドラインがあると進めやすい。
- ・ 青果卸は、賞味期限がないため、非常に管理も厳しい。特に、今年度はコロナ禍で業務筋の商品の販売が振るわない。ある業務用商品では、入荷量の約3割しか売れず、残りは全て廃棄処分しているような状況。
- ・ 小売業として消費者視点になれるかどうかが重要。コロナ禍で飲食業界が打撃を受けている分、家庭での食事が増え、家庭から出るごみが増えている可能性もあるという意見を聞き、企業としてどう対応するか持ち帰って検討したい。使いきり、食べきりサイズなど、消費者の視点に立った商品の開発をしなければならない。
- ・ 富山県でも高齢者が増えていることから、食事量や商品の販売量に関する見直しが必要。小容量販売やばら売りなど、販売方法の見直しが必要。
- ・ 富山市の飲食業界では、10年前から「食べきりん運動」に取り組んでおり、ハーフサイズメニューや持ち帰りにも協力してきた。最近では、コロナ禍でテイクアウトメニューが増えたが、これまでの取組みの成果を活かし、家庭で食べきるという面では協力できたのではないかと考えている。ただ、見栄えを重視した文化も大事だと考えているので、食べ残しの削減と見栄えの文化の両立を図っていきたい。
- ・ 3015運動は、司会者からの呼びかけが非常に重要。呼びかけ1つで、食べ残しが随分と減る。コロナ終息後も、徹底して実践すべき。また、業者にとっては、ごみが減るので、ごみ処理料金が減り、コストダウンにつながる。

<フードバンク活動>

- ・ フードバンク活動に関しては、できることから取組みを開始するとともに、どういったところが食品の受け手となるのかなど、仕組みを見える化することも必要。
- ・ フードドライブのマニュアルを作成されたことに、敬意を表したい。少し説明が多いという印象を持ったが、非常にありがたい。

<リサイクル>

- ・ エコフィードや肥料化などの取組みも進めているが、全ての食品廃棄物をこうした方法で利用できるわけではないので、どうしても利用が難しいものは、積極的にエネルギー化に回すことも必要ではないか。